中国現代文学選集　5　郭沫若・郁達夫集　松枝茂夫編

平凡社

私の幼少年時代　郭沫若　小野忍・丸山昇訳

辛亥革命前後　郭沫若　小野忍・丸山昇訳

南昌の一夜　郭沫若　松枝茂夫訳

ふ　沒わが青春　郁達夫　岡崎俊夫訳

叫　葉紹鈞・謝冰心・落華生　増田渉他訳

中国現代文学選集
全20巻

郭沫若・郁達夫集　他　　第11回配本・第5巻

昭和37年12月5日発行　©　定価450円

編者との申合せにより検印を省略します

編者　松枝茂夫

東京都千代田区四番町4番地
発行者　下中邦彦

東京都板橋区志村町1丁目1番地
印刷者　川上胖

平凡社

半印刷株式会社
津製本所

目次

私の幼少年時代

郭沫若作
小野忍
丸山昇訳

まえがき……三
第一編……四
第二編……三九
第三編……七〇

辛亥革命前後

郭沫若作
小野忍
丸山昇訳

発端……一二三

第一編……一一六
第二編……一五八

南昌の一夜

郭沫若作
松枝茂夫訳

涂家埠……一九七
南昌の一夜……二一〇
流沙……二三一
神泉……二三五

春風沈醉の夜

郁達夫作
岡崎俊夫訳

一……二四七
二……二四九
三……二五三
四……二五四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

過去　郁達夫作　岡崎俊夫訳　二六一

わが夢わが青春　郁達夫作　岡崎俊夫訳

一、悲劇の誕生……二七七
二、わが夢わが青春……二八一
三、書塾と学校……二八五
四、水のような春愁……二八九
五、遠くさらに遠く……二九四
六、孤独者……二九八
七、大風圏外……三〇二
八、海　上……三〇六

潘先生の避難　葉紹鈞作　増田渉訳

一……三三
二……三九
三……三五
わかれ　謝冰心作　松井博光訳……三三五
春桃　落華生作　松井博光作……三四七
解説……三六九

私の幼少年時代

郭沫若 作

小野忍
丸山昇 訳

まえがき

私の幼少年時代は封建社会から資本主義制度への転換の時代だった。

いま私はそれを暗黒の炭鉱の穴の底から掘り出して来る。

何もアウグスチヌスやルソーをまねて、懺悔をしようとするのではない。

何もゲーテやトルストイをまねて天才を描こうというのでもない。

私が書くのはこのような社会がこのようなひとりの男を生み出したということ、あるいはこのような時代にこのような人生が存在したということ。それだけのことだ。

第一編

一

大渡河が岷江（府河）に流れ込む地点の西南岸に、嘉定の町がそびえ立っている。郷土の地誌では「海棠の香る国」と呼ばれているところだが、その香り高い海棠はいまではもう絶えてしまっている。

嘉定の大西門から町を出、大渡河の西南岸にほぼぴったり沿って行くと、十里たらずで、大渡河に合流する雅河を渡る（この川がたぶん古書でいう若水であろう）。そこからさらに南方、町から七十五里（中国の一里は約六〇〇メートル）の距離にある沙湾と呼ばれる町、それが私の故郷である。

沙湾の通りは、大渡河沿いの他の町々と同様、まっすぐな細長い通りである。両側の家には非常に高く広いひさしがあり、そのあいだにどうにかあかりとりと排水に役立つだけの、せまい道がはさまっている。市が立つ二・四・七・十の日には、在の人々が荷をかついで通りに売りに来る。ふだんはまことに静かな町も、この時には両側のひさしの下が人々の雑踏する市場に変わるのである。

町の西には峨眉の連山が横たわり、東には大渡河の流れがある。しゃれた文句で郷土の人や風物を形容しようとする時、土地の人は、よく「綏山毓秀、沫水鍾霊」（綏山はすぐれたものを育て、沫水はよいものを集める）という文句を用いる。綏山とは峨眉山の第二峰、沫水とは大渡河のことである。

故郷の地理ではこの綏山と沫水が古代の文献に見られるだけで、沙湾の村自体には、旧蹟は全然ない。

村の北端に姚河壩という名の、非常に大きい砂州があり、それが昔の沙湾の村のあとだということである。百数十年前の「丙午」の年に、大渡河が氾濫して沙湾の村を水没させてしまったので、その後いまの場所に移ったのだという。その砂州の上にも何軒かの家と、韓王廟と呼ばれる古い廟がある。ここにまつってある韓王が漢の韓信（漢の三傑のひとりといわれた将軍。少年時代の股くぐりの話で有名）なのか、宋の韓世忠（金軍と戦った勇将）なのかはわからない。もとは他省出身者の同郷会館だったようである。

村の南端から半里離れて、峨眉山のふもとから下って来る非常に清らかな流れがある。その上に広い石橋が一つかかっている。橋を渡ってまもなく山麓の斜面に、明代に開かれた古寺があり、名を茶土寺という。そこは、明末の郷土出身の学者で嘉定生まれの安磐が書いた碑がある。これだけがおそらく沙湾の村にある唯一の名所であろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

寺の前に簡素な石碑が一つあって、ちょうど寺の山門のように見える。

「大明林母李宜人旌表節孝坊」（大明国の林氏の母。李宜人の貞節と孝行を表彰する碑）と記されているが、村には林という姓の人すらまったくいなくなっている。

何の名所旧蹟もない沙湾ではあるが、近くの村や町にくらべると全体の印象は、美しく明るい。もちろん通りが整然としていて新しく、山水の配置とも割に調和しているからである。

特に述べておきたいのはあの清らかな流れのことである。

その水は峨眉山の支脈からくねくねと流れ下って来る。茶土寺の近くまで来ると、流れもしだいに広がる。橋の南端には粉ひき小屋が何軒もあり、水を使うために流れに対して斜めに堤を築き、水を水槽の中に導いている。そのため堤の内側は水が自然に集まって深い淵をなしている。水は非常に澄んでおり、泳いでいる魚や小さい石まですべてはっきり見える。淵の南側は高い岩の崖になっていて、ところどころ非常に茂った榕樹がおおいかぶさっている。

四川地方は元来熱帯とは遠く離れているのだが、ほとんどどこにでも榕樹があり、荔枝がある。そのほかパンヤ、雪桃もあちこちにあるそうで、これはまったく不思議な現象である。木本の香りの高い海棠は私は見たことがないが、これに似た木は広東にもあるそうだから、それから推すとおそらくこれも亜熱帯植物なのであろう。

郷里では、榕樹はどれでも十かかえも二十かかえもある大木で、一般の人々は「黄角」と呼んでいた。この木はよくほかの大木に寄生するが、発育が早いので、二年たらずで主客所をかえるほどになり、もとの大木をまるで自分に寄生している木のようにしてしまう。そこで村の人々はみなこれをたいへんにきらっている。人々の迷信では、木があまり大きくなりすぎると精が生まれ、人間にたたりをすることがあるというのである。病気したりどこか痛んだりするたびに、迷信深い人々は、二、三寸の長さの釘を、小さい赤や緑の三角の布の上から幹にうちつける。こうすれば病気や痛みがなくなるというわけだ。あれほど大きくなりやすい黄角などは、当然厄除けの釘をたくさんうたれずにはすまないことになるのである。

清水の流れの南岸にある数本の大きな榕樹の幹も、この厄除けの釘を少なからず打ち込まれていた。それを見るとどうしても一種の陰惨な印象を受けたが、夏にそこで涼みながら釣糸を垂れることは、この上ない涼しさだった。

たぶん山水が割にすぐれていたせいだろうか、一般の文化や風俗は近くの村や町とくらべて少しちがっていたように思われる。

もちろん、もともときわめて辺鄙な村なのだから、あまり立派な文化を求めるわけにはいかないが、それでもここには

十人近い秀才（一定の試験に合格するなどして、科挙＝官吏登用試験＝の受験資格を得たもの）が出、後には最後の科挙で恩賜挙人（科挙の第一段階の試験＝郷試の合格者を挙人という。恩賜挙人とは三年ごとに行なわれる郷試とは別の、皇帝の恩恵で臨時に行なわれる郷試の合格者）を出した。これは近くの村々から見れば、鳳凰の毛や麒麟の角にも等しいことだったのである。この挙人は時代の悲劇の体現者ともいえるものなので、ここで彼の生涯をざっと述べてもさしつかえないだろうと思う。

この挙人は姓を陳といった。もとは貧しい儒医（儒者で医師を兼ねているもの）で、村で小さな薬屋を開いていた。もう年をとっていたが、つづけて十何回も科挙に落第し、どうしても及第できなかった。それが最後の科挙にみごと合格したのである。合格したのは恩挙だったにしても、もちろん大いに輝かしいことだ。彼は礼服を着こんであちこちあいさつにまわった。たぶんもらったお祝いも少なくなかっただろう。

あわれなことに、一生かけて望んでいたこの挙人の頂戴（官吏の等級を示す珠玉。帽子につけた）、あるいは一生かけて望んでいたこのお祝いの金といってもよいが、それこそ彼をそこなう毒薬だったのである。合格して半年にならぬうちに、彼は挙人なのだから「三妻二妾」を持ってもいいのだというわけで、若い妾をもらった。この女が、来てから三月もたたぬうちに彼を毒殺し、もらったお祝いの金を持って情夫といっしょに逃げてしまったのである。

村の人々はみなこの陳老先生のために嘆息して言ったものだった。「もしこの科挙にうからず、お祝いの金をもらわなければ、あの人だってせめてもう少しは生きられたろうし、こんなひどい目にあわずにすんだろうに」

人の命は当時の人々の目には、名にも利益にもまして貴重なものであったらしい。だが、事実はそうとも限らない。人人のおもな商売は造り酒屋、茶店、アヘン館であったが、これらはどれも利益さえ得られれば生命はまったく度外視する商売ではないか。その他追剝ぎのようなことは、特に村の一部の青年からは豪傑の行為と見られていたのである。

× × ×

銅河沙湾——土匪の巣窟！

嘉定の人はわが沙湾の話になると、ほとんどだれでもそう連想する。嘉定の土匪が大部分銅河—大渡河の俗名—から出ており、銅河の土匪の首領が大部分わが沙湾から出ているからである。われわれの沙湾の土匪の首領、大男の徐、和尚の楊三、和尚の徐三、犬の王二、隈取りの楊三、などはみな私より、六、七歳年上なだけで、なかにはわれわれが小さいころいっしょに遊んだことがあるものもいる。

和尚の楊三が最も有名だったが、彼は十何歳かの時、土匪

になったのである。ある時、私と私の五番目の兄とが川べりで凧をあげていると、和尚の楊三も、やって来た。彼はそのころもうあまり目につく所では動きまわらない男になっていたが、私たちの近くに来てしばらく立っていたかと思うと、急に身をひるがえしてかたわらの穴にもぐりこんだ。「役人が来やがった、すまねえがかくしてくれよ」。私たちが遠くのほうを見ると、はたして数人の役人が来るのが見えた。町の県の役所から来た、先ごめ銃を背負った下役人だった。彼らは土匪をつかまえる任務を持っていたのである。私たちはその穴のそばに立って、何事もないような顔をして、少しも動かなかった。その役人たちは近づいて来たが、気にもとめずに通り過ぎて行った。

和尚の楊三が名をあげたのは、大男の徐を救った時だった。大男の徐も私たちの村の人間で、やはり有名な土匪の首領だった。ある時彼が官兵にとらえられ、かごに入れられて嘉定の町へ運ばれて行く途中、和尚の楊三が手下たちを率いて追いかけ、彼を奪回して帰り、同時に陳把総（准尉）を殺したのである。この事件で郷里はまさに天地のひっくり返るような騒ぎになった。もともと物騒な所と見られていた銅河は、さらにまるで地獄と化したようだった。銅河流域の人はすべて鬼も同然であった。

事件発生後たくさんの糧子（当時兵のことを糧子といった・原注）が私たちの街へやって来、府知事大人と県知事旦那まで後からやって来たのである。私たちはまったくたいへんなにぎわいを目にした。だが、私たち子供が見てにぎやかでおもしろいと思っていた時、年寄りたちはだれもみなびくびくもので、食べ物ものどを通らなかった。府知事大人や県知事旦那はやって来るとわが沙湾を絶滅しようとしたからである。沙湾では村じゅうの人間がみな土匪をかくまっているというのだった。知事大旦那の威光は地下三尺まで透るというのだから、これはまったくおもしろいことどころではない。

町じゅうのおえら方がどのくらい寛容を請うたか知らないが（おそらくそのほかに少なからぬ「餞別」を贈ったのだろう）ふたりの知事さまはやっと和尚の楊三の家だけを没収するということで承知してくれた。和尚の楊三の家は沙湾にあり、私たちの家のすじ向かいだった。知事さまはおなさけをもって和尚の楊三の家だけを没収するということは、ご慈悲で承知してくれはしたものの、彼らはまったく頭がよく、役人に火をつけさせ、楊家の建物を焼きはらうとおっしゃる。これでは村じゅう焼きはらうのとどれほどのちがいがあろう。櫛のようにならんでいる町並の中で、いくら気のきいた火でも、きちんと一軒だけ焼きはらうなどということができるはずがない。このことのために、当然あの十数人の秀才の頂戴がわずらわされた。彼らが正式に衣冠を正してなんども陳情し、やっと家をとりこわしてから大渡河の川べりに運んで燃

やすということになった。一般の人々は、これは知事さまたちの無量のご恩であると言ったが、同時にあの十数個の銅の頂戴が光を増したのはいうまでもない。

こうして多くの曲折を経た後、府県知事が着いてから三日目になって、和尚の楊三の家は焼きはらわれた。その時の光景はまったく壮観といえるものだった。間口三部屋、奥行三棟の大邸宅はこわして焼くのにまる一日かかり、大渡河のほとりで、まるで「火焼連営八百里」のように、積み上げた二十いくつの山が燃えつづけた。われわれ子供が大いに愉快だったのはいうまでもないが、老人たちもこの時にはむろん他人の災禍を楽しむ残忍性を惜しみなく発揮し、善には福が来、悪には禍が来るという彼らの昔ながらの教えを声高に話し合っていた。彼らも大いに愉快だったのだ。一年じゅう一歩も出ない女たちや付近の村々の農民たちもみな川べりにやって来て、にぎわいを見物した。食べもの売り、手品師、易者などが火のそばに集まって来て商売を独占した。それはまるで五月の王爺のお祭りのようだった。――郷里の人々の話では、五月は王爺菩薩が生まれた月で、それで毎年お祭りするのだそうである。この王爺菩薩とはたぶん二郎神のことであろう。これは秦代に蜀郡の太守だった李冰の息子で、水利をつかさどる神である。

村の人がこれほどよろこんだのも理の当然である。自分は災難を免れて、肖神を見る結果になり（村の人は他人の災難を楽しむことを「肖神を見る」という。おそらく十二肖神と人の禍福とは大いに関係があるからであろう・原注）、知事さまの天顔を見る結果になり、その上、ひそかに自分の復讐の欲望を満足させる結果になったのだから。

村の人々の地方意識はたいへんなものだった。他の省ではどうかよく知らぬが、われわれの四川では一つの大きな封建社会の中に、無数の小さな封建社会が含まれていた。四川の人々は明末清初のころ、張献忠の四川虐殺として伝えられる大虐殺にあっている。四川の人は、「張献忠の四川虐殺、鶏や犬さえ残りゃせぬ」とよくいう。これはやや誇大であるにちがいないが、当時は地主は蜂起した農民を殺し、農民は反動地主を殺し、満人は漢人を殺し、漢人は満人を殺し、互いに虐殺した数は確かに少なくなかったのである。そのためにあの広大な土地に飯の食える所がたくさん空いた。そして四川以外の、特に人口過剰に悩む東南地方から、相当の規模の移民が移動し、西に向かって伸びて行った。現在の四川人は、清朝以前からの土着の人は非常に少なく、大部分は他省からの移民である。これらの移民はここでそれぞれ自分たちの集団を構成し、それぞれ独自の神をまつり、独自の同郷会館を持ち、すでに三百年余りたったにもかかわらず、こういった地方意識、特に本来の土着民とよそものとの地方意識は打破されていない。

楊という一族はわれわれの地方の土着のもので、彼らはふ

だん自分が土地の主人だという気でおり、われわれよそものに何かにつけていやがらせをしていた。私たちのあの小さな沙湾では、よそものが八割以上を占めようというほどであったし、長江流域以南の人はほとんど各省のものがいたので、楊一族も、村じゅうから嫌われないわけにいかなかった。私たちの祖先は福建から移って来たもので、原籍は福建汀州府寧化県だった。話によると私たちの祖先は二枚の麻布を背負って四川に来たのだったという。封建時代に故郷を離れねばならぬ羽目に陥ったのだから、もちろん赤貧の人だった。こうした赤貧の人が他郷に流れつき、次第にそこで羽振りをよくして行ったのだから、こういう地方では当然階級的感情や身分的感情もあって、地方的感情が余計に強まるということにもなるのだ。

よそものの中では私たちの一族はわりに発展していたので、楊一族と対立する形になっていた。土地のことがらについて、公私両面すべてにわたってひそかに争いが行なわれた。たとえば、われわれが天足会（纏足廃止運動の会）を起こすと、彼らは全足会というのを組織する。われわれが福建人の同郷会館で蒙学堂（一種の小学校）を開くと、彼らは彼らの瑤珉宮で別のを開く。あらゆることがらがすべてそうだった。だが、土着の中では楊一族がやや形をなしていただけで、その他はほとんど落ちぶれていた。したがって人的にも経済的にもよそものにはかなわず、競争でも自然に劣敗者の地位にあった。負けていると思えば思うほど、不満がつのる。そこで毎度横車を押すことになる。楊一族は郷里で一般人の公敵のようになっていたのである。

公敵の住家がとりこわされる、これはなんと楽しいことだろう？　人々はみな川ばたで見物し、こわされた家のあとで和尚の楊三の家族が泣くだけであった。和尚の楊三の父親も知事さまたちにつかまって行った。

このような氏族の対立、地方意識から来る悪感情などは、私たち子供の心には何の作用もなかった。私たちは小さい時には和尚の楊三をいつも親友と思っており、彼はまるで「三国志演義」か「水滸伝」中の人物のように思えた。この迫害を受けてからは、彼はまったく秘密社会の人となった。彼については小説のような伝説が少なからずあった。後にはまた彼が死んだという噂を聞いたが、いつどんな所で死んだのかもわからなかった。彼は私の記憶では永遠に私たちが凧をあげていた当時の、十五、六歳のすばしこい少年である。

×　×　×

銅河の土匪がどんなに多くても、私たち銅河に生まれた者は、別に何も恐ろしいとは思わなかった。一般に土匪になる青年にしても、大部分は中産階級の家の子弟だったのである。当時彼らは正業にはげまぬ青年と罵られていたが、当時の社会にはもう青年のはげめるような正業がないことをだれ

も知らなかったのだ。ましてそうなった原因は何かを知っているものがいなかったのはいうまでもない。

土匪の愛郷心は非常に厚いもので、彼らはどんなに「凶悪」であっても、彼らのおきてで、故郷の十五里以内では決して事を起こさなかった。彼らは財神・童子・観音をさらい、（郷里の土匪が人を誘拐して身代金をゆする時の用語で、男を財神、子供を童子、女を観音といった・原注）、強盗もしたが、自分の村の人を襲ったことは一度もなかった。彼らが襲うのはたいていいなかのいわゆる「土老肥」――一銭が命のようだという悪地主だった。それが彼らの看板にする義侠心だった。そういう義侠心を証明する事実が私たちの家にも起こったことがある。

私の父が若いころ雲土（雲南産のアヘンのこと・原注）を仕入れて商売をしていたことがある。彼は自分が雲南に行ったことはなかったが、いつも人をやっていた。

なんでもある時、私の家の仕入れ人が、十数担（一担は百斤）仕入れて雲南から帰って来たところ、家から三十里離れた千仏崖で略奪にあったのだそうである。人夫はちりぢりに逃げてしまい、仕入れ人だけ残って帰って来た。父は私の家が略奪にあったのはこれがはじめてだと思った。ところが、不思議！　翌朝家の表門をあけた時、略奪された雲土が封も切らずにもとのまま、しきいの台の上に並べてあった。略奪された品物が送り返されたのである。しかも一枚の書きつけがつけてあった。

「失礼しました。やった時には外来の商人だと思いましたが、入手後手紙を調べ、はじめてこの品物のご主人を知りました。謹んで品物を持主にお返しいたします。お騒がせしました、お許しください」

これだけで姓名もなく、だれが書いたものか、どこから持って来たのかもわからなかった。

注

「三国志演義」中、劉備が呉の陸遜の火攻めにあい、七百余里にわたって駐屯した蜀軍が焼き尽くされて、身をもってのがれた故事。脚色されて京劇「連営寨」にもなっている。

二

そのような土匪の巣窟に、一八九二年の秋、私が生まれた。甲午中日の戦い（日清戦争）の三年前、戊戌政変（一八九八年、戊戌の年、康有為らの改良主義者の政治改革が西太后を中心とする保守派のクーデターによってついえた事件）の七年前、庚子（一九〇〇年、庚子の年の義和団事件）の八ヵ国連合軍の北京入城の九年前であった。私の幼少年時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.